

指導計画と授業に関する17のチェックポイント

後藤 忠

＜道徳教育の全体計画と年間指導計画のポイント＞

- (1) 学校における道徳教育は、学校の教育活動全体を通して行うことを基本とする。したがって、道徳教育の全体計画は必要である。  
(学習指導要領解説 総則編 第3章第6節1参照)
- (2) 全体計画に基づき道徳科の年間指導計画の見直しを図る。  
(学習指導要領解説 特別の教科道徳編 第4章第1節 参照)

＜学級経営のチェックポイント＞ ※学級が基盤となって道徳性が養われる

- (3) 望ましい学級の雰囲気か。
  - ①一人一人の個性・能力が尊重され、人格の自由が保障されているか。
  - ②思いやりにあふれ、失敗や過ちを許し合う寛容の雰囲気があるか。
  - ③個々の役割と責任の確立、及び助け合い協力し合う雰囲気があるか。
  - ④公平でしかも公正な平等原理が確立されているか。
  - ⑤集団の規律が確立されているか。
- (4) 児童生徒理解が的確になされているか。  
児童生徒の悪い面や劣っている面を指摘して、それを直そうとするのではなく、良い面・優れている面を積極的に理解し、認める全人的把握が必要である。

＜授業前のチェックポイント＞

- (5) 道徳科の目標が正しく理解されているか。
  - ① 道徳科の授業は、児童（生徒）が自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己の（人間としての）生き方についての考えを深める学習を行う授業である。
  - ② 道徳的価値を押し付け、注入しようとしていないか。
  - ③ 道徳的実践や行為ができるようにしようと思っていないか。
- (6) 「ねらい」が適切に設定されているか。（ねらいは授業の出口。鮮明なねらいを立てる）
  - ① それぞれの学年の内容項目に準拠し、本時の「主題」に即して具体的に分かりやすく設定されているか。
  - ② 語尾の吟味がなされているか。  
「～しようとする心情を育てる。」「～についての判断力を育てる。」「～しようとする態度を育てる。」「～しようとする意欲を育てる。」
- (7) よい教材を選択しているか＜教材は授業の命＞  
～道徳の教材は子どもの内面を映し出す鏡であり、生き方の糧となるものである～
  - ア ねらいを達成するのにふさわしい教材か
  - イ 児童生徒の興味・関心、発達に合った教材か
  - ウ 多様な考えや感じ方が引き出され、深く考えさせる教材か
  - エ 特定の価値観に偏していない教材か
  - オ 読み物教材、視聴覚教材などの特質を生かした教材か

(8) 教材の特質に合った活用方法を考えているか。

読み物教材の活用はもとより、VTR、紙芝居、録音教材などの活用も考えたい。また、詩、短歌、漫画、シナリオ、新聞記事等も必要に応じて活用したい。

(9) 教材提示の工夫を考えているか。

児童生徒の心に響く提示を工夫する。(読み聞かせの工夫、BGM、視聴覚に訴える教材提示の工夫など)

<授業でのチェックポイント> ※「学習指導過程」は徹底して主題を貫く。

(10) 導入は効果的であるか。

**導入**・・児童生徒が学習の課題や方向をつかみ、学習意欲を喚起する段階

\*導入には「ねらいとする価値への導入」と「教材への導入」とがあるが、「ねらいとする価値への導入」を基本とする。(授業がぶれにくくなる。)

\*児童生徒を抽象的な概念思考に導くような導入はしない。主題に添って具体的に考えさせ、学習意欲を喚起するよ  
うに工夫する。

(11) 学習指導過程の工夫はされているか。

**展開の前段**・・児童生徒に教材の登場人物に自己を投影させ、その時の感じ方や考え方を引き出し、それを積み重ね  
ながら「本時のねらい」に迫っていく学習をする段階

\*発問はよく吟味し、基本となる発問を3程度設定する。そのうち、本時のねらいに直接迫る発問を中心発問とする。

\*発問を構成するには、綿密な教材分析が必要である。その教材分析を基に、教材の何処に着眼点をして発問を構成す  
るかよく吟味する。

\*教材に書いてあることを捜させるのではなく、教材文の行間を深く考えさせる発問を作る。

**望ましくない発問**

- ①発問の意図やねらいが曖昧なもの
- ②発問・指示・助言が混同しているもの
- ③心情・判断・理解のどの側面の発問なのか分からないもの
- ④本時のねらいや指導内容に添っていないもの
- ⑤発問に順序性がないもの
- ⑥教材の事実を押えていないもの(どこの何を問われているか分からないもの)
- ⑦やつぎばやの発問
- ⑧発達の段階や個人差を考えていないもの
- ⑨児童生徒の反応に正しく対応していないもの
- ⑩中心発問がよく吟味されていないもの
- ⑪「なぜなぜづくし」の発問
- ⑫「自分だったらどうするか」のような発問
- ⑬補助発問が用意されていないもの

**展開の後段**・・主題に照らして児童生徒が自己を見つめ、自己の生き方についての考えを深める学習をする段階

\*展開の前段での学習の流れ(主題)に沿って、考える必然性のある学習にする。

\*単なる経験の想起や決意表明に陥らない。

\*反省や懺悔の繰り返しは自尊感情を低下させる。

\*極めてプライベートな学習であることに十分留意して指導する。

(12) 終末の工夫は適切か。

**終末**・・学習をまとめ、生きる希望と勇気をもつ段階

\*教師の体験談を語ったり、取材した録音テープを聞かせたり、あるいは関連する内容の別の副教材を読み聞かせたり、手紙文を書かせたりなどする。

\*教師の説話はお説教にならないことが大切である。教師の体験談は成功談よりも失敗談の方が効果的な場合が多い。

## <その他、道徳科授業全体を通してのチェックポイント>

(13) 道徳科授業での教師の役割について正しく理解しているか。

\*教師の役割は児童生徒の感じ方や考え方を引き出し、受け止め、整理し、板書などに位置付ける、いわば「交通整理のおまわりさん」のような役割であることを理解して授業を行うことが大切である。

\*道徳科の学習においては「正解」「誤答」の区別はない。各自がそれぞれ正直に考えたことはみんな正しい考えだという受け止めが必要である。

\*道徳科の授業は、児童生徒の問題行動や欠点を対処療法的に是正し、問題行動の解決を図るために行う授業ではない。児童生徒と教師が共に、教材に照らして自己を見つめ、自己の生き方について考え合う時間である。

(14) 板書は構造化されているか。

\*板書は、学習の展開に従って児童生徒の思考を分類・整理し、児童生徒の言葉を用いて、ねらいへと構造的にまとめていくものである。したがって、単に右から左へと流れる板書ばかりではなく、上下左右、中央など様々な方向から「ねらい」へ迫っていく板書が工夫されてよい。

\*板書を見れば授業が分かる。

(15) 児童生徒の話し合い活動は組織化されているか。

\*道徳科の学習において「話し合い活動」は特に重要な役割をもつ。「話し合い活動」を通して、児童生徒は、

- ①自分の考え（感じ方）の曖昧さに気付く。
- ②自分の考え（感じ方）がはっきりする。
- ③自分の考え（感じ方）と人の考え（感じ方）の違いに気付く。
- ④自分の考え（感じ方）が強まる。
- ⑤自分の考え（感じ方）が変化する。（しかし、これは減多に起こらない。）

\*したがって、(3)の学級の雰囲気大切である。

\*さらに、「話し合い活動」にふさわしい学習形体が取られているか、話し合い活動の訓練がなされているか等、話し合いが機能する条件を整えていく努力が日ごろより必要である。

(16) 個に応じた指導がなされているか。

\*同じ教材を使っても、個々の受け止め方は多様である。したがって、日常の児童生徒理解を的確に行い、その中から意図的な指名や書く活動等の方法を用いて、個に応じた指導の充実を図ることは必要である。

(17) 家庭・地域との連携が図られているか。

\*児童生徒の実態理解や指導効果を高める工夫のためには家庭との連携が不可欠である。したがって、道徳ノートや道徳だより等の活用を通して、家庭へ指導情報を提供したり、また、家庭から情報を得たりしていきたい。

\*授業参観日には道徳の授業を年に1度以上行い、家庭や地域の理解を得ていきたい。

\*必要に応じて家庭や地域に取材し、それを教材として用いると児童生徒の興味・関心を引く授業になる。